

日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース 1997年 夏号 No. 8

アクセス6000件突破!! 行動分析学ホームページ <http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

『行動分析学ホームページ』開設のご案内と今後の展開

望月 要 (メディア教育開発センター)

『行動分析学ホームページ』

今年の2月、『行動分析学ホームページ』を開設致しました。開設に当たっては、島宗さん(鳴門教育大学)、寺田さん(白梅女子短期大学)をはじめ、多くの皆様から御協力と御声援を戴きました。1997年2月1日から1997年8月31日午前8:20までに、延べ6,162件のアクセスがあり、まずは順調なスタートを切ることができたと思っております。

既に多くの方が御覧下さっているとは思いますが、まずは『行動分析学ホームページ』の現状を簡単に御紹介致します。『行動分析学会』のページには、『行動分析学研究』、『ニューズレター』、倫理綱領、入会方法、会則、年次大会の案内を掲載しています。『行動分析学研究』については、創刊号以来の総目次と、9巻以降については全論文の抄録を見ることができます。『ニューズレター』は、創刊号以来の全文(図表を除く)を掲載し、前号からは、印刷版よりも一足早く公開することが可能になりました。

『行動分析学』全般のページには、国内外の行動分析学関連ページへのリンク集、行動分析学関係者のE-mailアドレスブック、『行動分析学メーリングリスト(bml)』と『行動分析学シリーズ』出版プロジェクト・メーリングリスト(babook)の案内、行動分析学関係の書籍・雑誌を紹介する『行動分析学図書・雑誌室』のページがあります。アドレスブックは、研究者相互の情報交換を促進するために設けたもので、現在22名の方に登録して載せております。

今後の課題: 積極的な情報発信を!

WWWが普及して既に長い時間が経っているのに、日本の学術団体のホームページには、未だにただの《看板》のようなページが多いのは歯痒い思いがします。印刷物よりも、迅速・柔軟に情報を発信することができるWWWの利点を活かし、『行動分析学ホームページ』では、積極的な情報発信を展開して行きたいと考えております。とは言っても《管理人》1人の力で実現できることなど、たかが知れています。以下は「こんな情報を掲載したい!」という、私からの提案です。御賛同戴ける方がありましたら、是非、情報の提供、原稿執筆、編集作業などの御協力を戴きたく、お願い申し上げます。勿論、新しい企画も大歓迎致します。

書籍・文献案内の充実

現在『行動分析学図書・雑誌室』には、島宗さんが御自身のページで制作された『日本語で読める行動分析学の本』ページへのリンクしかありません。行動分析学の基本文献、ゼミや読書会、合宿の課題に使えるような書籍、新刊書(特に外国語の)のミニ書評、展望論文やテクニカルノートなど研究を進める上で役に立つ文献のリストなどを紹介して載ければと存じます。

行動分析学用語集

ネットワーク経由で誰でも手軽に見ることができる用語集——勿論、それは重要な機能ではありませんが、もう一步欲張って、用語の定義に関する議論や、訳語選定のプロセスを記録し、公開するようなページを作りたいと考えています。安直に情報を求めるためだけの用語集ではなく、権威を押しつける用語集でもない。むしろ良い意味で混乱を引き起こし、議論の火種になるような用語集を実現してみたいと思っております。

オリジナル文献・データ書庫

この世の中には、刊行されてはいないけれど、埋もれさせてしまうには惜しい原稿、貴重な資料が沢山あります。例えば、卒業研究のデータ、ゼミや内輪の研究のために作ったハンドアウト、個人的に作った文献リストやノート、研究・実践を行う上での《ちょっとしたコツ》、技術資料、コンピュータ・ソフトウェア... いずれも同じテーマに取り組む人にとっては貴重な情報です。いわゆるネガティブ・データが出た研究結果も、学術雑誌に掲載されることは滅多にありませんが、こうした情報を研究者の間で共有することができれば、研究活動の有効な弁別刺激として機能する筈です。

また、既に発表されたものであっても、読者の範囲が限られていたり、検索・入手が難しい文献や資料もあります。こうした情報を積極的に蓄積し公開して行きたいと思っております。

この活動は、心理学全般については、既に『[心理学文献書庫 \(pda-j\)](http://www.nuis.ac.jp/pda-j/)』(<http://www.nuis.ac.jp/pda-j/>)で始められています(私も運営スタッフの1人だったりします)。行動分析学独自の書庫を作るべきか、pda-jに統合するべきか、《管理人》としてもちょっと迷っています。

チュートリアル

行動分析学の研究・実践を計画し、実行し、データを分析し、レポートや論文として発表する、その一連の過程で必要になる技術的なアドバイスをまとめたページを作りたいと考えております。最初は、『行動分析学研究』執筆・投稿の手引の拡張版でも構わないかも知れません。

方法論に関する良書は既に何冊か刊行されております。しかし、Web版には、パソコンで論文を書いたりデータを整理している時、いつでも見ることができるという利点があります。

ミラーサイトの設置

『行動分析学ホームページ』はSINET(サイネット)の上にあります。そのため同じSINETに接続している大学からは、ほぼ瞬時にアクセスできるのですが、WIDEや商用ネットワークからはアクセスに非常に時間がかかり、実用にならない場合すらあります。これを解決するために、WIDEか商用ネットワークの上に『行動分析学ホームページ』の《支店》を作り、どちらでも便利な方にアクセスできるようにしたいと考えております(WIDEに接続している研究室の方で、サーバーを御提供戴ける方は、いらっしゃいませんか?)。

ネットワークの世界に良き随伴性を!

Internetの《検閲》などという提案が聞こえて来ます。Internetという新しい環境の随伴性を十分に経験しないうちに、既存のルールで統制してしまうのは、惜しい気がします。この新しい環境を、快適で有意義なものに変えて行くためにも、その未知の可能性を引き出すためにも、まずは、様々なレパトリのオペラント行動を活発に自発してみる必要があるのではないのでしょうか? そのなかで形成され、選択され、生き残って行く随伴性こそ価値あるものではないのでしょうか?

この記事と『行動分析学ホームページ』に関して、御意見・アイデア・感想・御叱責、なんでも結構ですので、御暇な折にmoc@nime.ac.jpまでお寄せ下さい。

私のイチオシ 今年のABA 駒沢大学トリオ de あげ

すでに前号でお知らせしたように、今年のABAはたいへんな盛況で、日本からもたくさんの方が参加しました。編集局では、中でも明日の日本の行動分析学会をになう若手に注目し、渡米前から原稿を依頼していました。タイトルは「私のイチオシ」。イチオシとは、芸能事務所などで、一番力を入れて売りだそうとする所属タレントやCDをさすタクトです。ここでは、今年のABAで、個人的に一番気に入った発表についてレポートしてもらいました[編]。

モーニングサイドについて

北 理恵子(駒沢大学人文科学研究科)

Large-Scale Implementation of an Instructional System: Lessons and Plans (Symposium)

Chair: Ogden Lindsley (Behavior Research Company, Laurence, Kansas)

Discussant: Kent R. Johnson (Morningside Learning Systems, Seattle)

初めて「モーニングサイド」ということばを聞いたのは、ABAが始まって2日ほどたったある夜の食事会の席でした。ABAが終わってからシアトル行きを予定しており、そのことを隣に座った女性に話したところ、「シアトルはモーニングサイドが有名だから、ぜひ見学してきたら？」と勧められたのです。モーニングサイドなどというものは今まで聞いたことがなかったため(恥ずかしながら)、いろいろ質問していると、今度は前に座っている男性が、実はモーニングサイドのスタッフであると自己紹介してくれました。彼の話によれば、モーニングサイドとは、正しくは「モーニングサイド・ラーニング・システム」という教育の助成システム？のようなものであることがわかりました。このモーニングサイドについての発表がちょうど翌日にあることを彼に教えてもらったので、さっそく行ってみることにしました。

「Large-Scale Implementation of an Instruction System : Lesson and Plans」と題されたシンポジウムは翌朝(25日)の9時からでした。それまであまり教育関係について興味を持っていなかったため、何の予備知識もないままのこのこと出掛けていったのですが、行ってまずびっくりしたのは出席者の多さでした。比較的早い時間のシンポジウムであったにもかかわらず、私が行ったときには立ち見の人たちで後ろの通路が埋め尽くされていました。それでもなお続々と人々が集まってきているため、部屋の中央の通路にじかに座って聴くことにしました。

モーニングサイドというシステムはおもにシアトルとシカゴで実践されている学習効率向上のための教育システムだそうです。対象となるのは、知的障害や学習障害を持っているわけではなく、単に学習の具体的な方法がわからないために遅れをとっていると思われる子供たちです。従って学習促進のための具体的な方法とは、図書館の利用の仕方であったり、ドリルのやり方だったり、私が想像したより遙かに实际的で具体的な方法でした。それらの方法を非常に細かくしかも体系だてて指導していくわけです。ある発表者によれば、それまで学年で学業成績が最低レベルにいた生徒にドリルを使用して段階的に学習の仕方を指導したり、わからないところをどうやって解いていくかということ指導したところ、成績が著しくアップし、その成績は半年たった現時点でも維持されているということでした。学習の具体的な方法がわからないために学業成績が芳しくないという児童に、自分でそれができるようになるまで少しずつ繰り返して教えていくわけです。だから彼らの発表の中にはごく頻りに「スキルを獲得させる」という言葉が出てきました。これを獲得することだけで学業成績が上がる例は非常に多いのだそうです。

次にモーニングサイドを実際に導入しているシカゴの公立学校の教師、校長先生がそのシステムについての発表を行うと、それまで熱心に聞いていた人々がこぞ彼らに質問をし始めました。内容は、現在のシカゴの公立学校の現状、モーニングサイド導入のメリット、スタッフと教師間の連絡の仕方、また小テストを繰り返すことについての是非を問うものなどさまざま、非常に熱気を帯びたものになってきました。質問が絶え間なく続き、最後は会場に来ていたシカゴの公立学校のほかの教師たちも前に出て紹介され、現場の状況が逐一語られました。この学校の校長先生の話によると、シカゴ市内でこの学校がある地区は労働者層が多く居住しており、家庭環境や経済状態は必ずしも良いとはいえない、ということでした。そのため校長先生が真剣な面持ちで、シンポジウム参加者に寄付の要請をしていた姿が非常に印象に残りました。これほどシンポジストと参加者が活発にやりとりを交わすシンポジウムは初めてだったのですが、おかげでシカゴの学校の様子がよくわかり、またここに来ていた人々の関心度の高さも知ることができました。

そして、一番最後に拍手で迎えられたのは、この「モーニングサイド・ラーニング・システム」の創始者であるKent R. Johnsonという人でした。彼は現状の教育方法に問題を感じ、シアトルでこのモーニングサイドを個人的に始めたのだそうです。一番最初に発表したシンポジストが彼に初めて会ったときの印象を語っていましたが、その言葉どおり黒いジーンズ、黒いTシャツ、カーリーヘアのタフない出で立ちだったので少し驚いてしまいました。しかし、その風貌に反し彼の教育に対する姿勢は真摯で誠実であり、子どもたちに対してよりよい教育とは何かということを皆に考えさせる内容でした。私自身もシンポジウムが終わったときには、少なからずモーニングサイドについて興味を持ち、もっと知りたいと思うようになっていました。

いままであまり深く考える機会がなかった教育について、いろいろと考えるきっかけができ、この

シンポジウムへの参加は私にとって実りの多いものとなりました。残念ながら、後日に赴いたシアトルでは時間がなく、実際モーニングサイドの実践現場を見学することはできませんでした。来年こそはABAの帰りに、モーニングサイドの実践現場の見学を目的に再びシアトルを訪れようと計画を立てています。

自傷行動の機能的な分析

河野友香(駒沢大学人文科学研究科)

Assessment and Treatment of Multiple Topographies and Functions of Self-Injury
(Poster)

Angela M.Gonzalez,Richard G.Smith,and Robert M.Churchill (University of North Texas)

私は、昨年J-ABAニュースでお知らせがあったUniversity of North Texasでの短期留学でDr.Richard G. Smithの大学院のクラスを聴講させていただきました。その際、1)ある行動を維持しているのは必ずしも1つの強化随伴性によるものではないかもしれないこと、2)ある行動は必ずしも1つの機能のみを果たしているわけではないかもしれないことを学びました。行動分析の勉強を始めたばかりの私は、それ以前まで「1つの行動に対しては、1つの強化随伴性」と考えていたので、この考えは私にとってとても興味深いものに思えました。そして、その授業をとっている大学院生がそれに関連した実験をやっているということだったので、当時その実験を見学しました。

今年のABAでは、その実験をその学生が発表するということがだったので、私は「あの実験結果は、どうなったのでしょうか」という期待と「英語の発表を果たしてどこまで理解できるのかしら」という不安を胸にその発表を聞きに行きました。

その発表は、Assessment and Treatment of Multiple Topographies and Functions of Self-Injuryというタイトルで、Gonzalez,Smith,and Churchill, 3名の連名で行われていました。内容は、自傷行為(self-injurious behavior:SIB)とされる(1)頭を強く打ち付ける行動(head banging:HB)と(2)頭を平手で叩く行動(head slapping: HS)の機能が独立していることを調べ、その治療を行うものです。

研究の方法としては、1)さまざまな条件下でのHBとHSの発生頻度を測定し、2)特に発生頻度の多かった要求条件(30秒ごとに作業が与えられる)に的を絞って、その条件下でのHBとHSの発生頻度を秒単位で調べました。その結果、まずHSが作業の逃避行動として高い比率で生じたのに対し、HBの比率が低かったことから、HB、HSの機能が同じものではないことを確認し、次に治療を試みました。それは、HB,HSの発生頻度の多かった要求条件と1人での条件の2つの条件において、非随伴刺激(Noncontingent Tangibles)として玩具が存在する場合についての検討です。これは、以前に玩具が存在する条件下でHBとHSの発生頻度が低かったことを受けていると考えられます。その結果、非随伴刺激が存在する状態でSIBの発生頻度の減少、特にHSが非常に少なくなることが判明しました。

この実験から、要求条件でのSIBの発生頻度の減少は非随伴刺激が逃避行動への確立化操作を変化させた(逃避要求の低下)ことによって生じた可能性があるかと著者等は示唆しています。

この発表を聞くことにより、1つの言葉でまとめて表現されている行動が、実はSIBの中のHBやHSのように、その行動形態の違いごとに別々の機能を有していること、そして非随伴刺激が行動自発時の動機付け要因に影響を与えること、そして何よりもDr.Smithの授業で学んだことをよく理解できました。ただ、この実験ではHBの機能が十分明らかにならなかったため今後の検討を期待したいです。

この実験は、大学院生のインターンシップの一環として学生が公共の福祉施設で行ったものです。こうした制度があることもとても素晴らしいことだと思いました。

また、全体を通じて思ったことは、発表の仕方にユーモアがあったということです。これは、ABAにいらしていた日本の先生方から伺ったことですが、このユーモアも発表シナリオに含まれているのだそうです。私には、それがアドリブに思えたので、ますます発表者の発表に対する真摯さに感銘を受けました。

「自動的な」シェイピング技術の開発

山岸直基(駒沢大学人文科学研究科)

Human Schedule Performance: In Spite of Talking

Michael Fryger (University of North Texas)

私は今年初めてABAの年次大会に参加しました。周囲の先生方からはこれはお祭りみたいなものだと言われてきましたが、実際の発表は英語で行われるわけで、どのくらい理解することができるか不安でした。しかし会場の雰囲気気を味わうだけでも価値があるだろうと軽い気持ちで参加しました。そして私は実験的行動分析に興味があったので特に人間およびそれ以外の動物を被験対象にした基礎的な実験研究を見てまわりました。そのなかでも目を引いた研究発表は、Michael Fryger (University of North Texas)のポスター発表でした。少しもったいをつけたような“Human Schedule Performance: In Spite of talking”という題名をプログラムで見たときから「これは見に行かなければ」と思っていたものでした。

この研究の内容は比較的単純なものでした。人間を対象として、基本的な強化スケジュールである定間隔(FI)スケジュールと定比率(FR)スケジュールにおけるパフォーマンスを報告していました。このポスターには累積記録が提示されていたのですが、FIスケジュールにさらされた被験者のデータには、強化子提示後に一定期間の反応休止があり、その後強化子が得られるまで一定の率で反応が出現するブレイクアンドラン(break and run)がきれいに描かれていました。そしてFRスケジュールでは一定の反応率で反応が出現していました。さらに、FIスケジュールFRスケジュールの両方においてその値を個人内で変化させていたのですが、その値の変化に伴い、FIでは強化後休止の時間が、そしてFRでは反応率が変化していました。これは人間がスケジュールの違いやその値に対して敏感であることを示しています。そしてこのような結果になった理由は「反応形成(shaping)」にありました。

この研究では、画面にテンキーの配列のように表示された1から9までの数字のボタンをマウスで操作することが被験者に要求されました。そしてそのテンキーに対して系列反応が生起するようにシェイピングを行ったわけですが、それはコンピュータによる「自動的な」シェイピングでした(これは自動反応形成 auto shaping とは全く異なるものです)。ここに本研究の特徴があるわけです。系列反応は特定の3つのテンキーを順番に押すというものだったのですが、たとえばそれが[1-8-5]という系列だったとします。この場合、初めに1を押した場合、1のボタンは押されたままの状態になります(画面上で)。しかし、初めに1以外のボタンを押してもそのボタンは押されたままの状態にはなりません。そして、1を押してそれが押されたままの状態になった後に8を押すと今度は1と8のボタンが押されたままの状態になります。しかし、1の次に8以外のボタンを押した場合には1のボタンを含めてすべてのボタンが押されていない状態に戻ります。この場合、また1のボタンから押さなければなりません。1、8と押して次に5を押すと完了反応をするためのボタンが現れ、それを押すことにより得点が与えられます。1、8の後に5以外の数字を押すとすべてのボタンが押されていない状態に戻りはじめからやり直しになります。

このような手続きにより系列反応のシェイピングを行いました。そして反応が安定した後にFIスケジュールやFRスケジュールに移行して先に述べたような感受性を示すという結果を得たのです。

これまでの研究でもシェイピングによって反応を形成したときに強化スケジュールに対する感受性が高くなることが示されています(Matthews, Shimoff, Catania, and Sagvolden, 1977, JEAB, 27, 453-467.)。しかし、Matthews et al.(1977)との違いは、Matthews et al.(1977)では強化子が実験者によって提示されるハンドシェイピングを行ったのに対して、この研究ではシェイピングがコンピュータによってなされたということです。この2つは手続きの正確さという点で大きな違いがあるのです。ハンドシェイピングは手動で反応を形成するのでその手続きの中に任意性が生まれてしまい、同じ手続きを複数の被験者に対して行ったという保証をするのが難しいけれど、シェイピングの手続きをコンピュータによって自動化することにより複数の被験者に対して同じ手続きを行ったという保証をすることができるのです。また、ハンドシェイピングにおける実験者のシェイピングの上手さ(下手さ)の問題を回避することが可能になるのです。もちろんハンドシェイピングとこの「自動的な」シェイピングが等価な機能を持っているのかという問題については今後の研究によって明らかになるわけですが、この研究により、一段と緻密な実験をするためのシェイピング技術が開発されたわけで、これにより人間行動の研究がさらに活発になることが期待されます。この点がこの

研究を私が「イチオシ」とした理由なのです。

「羊たちの沈黙：内なるものは外にあり」

シリーズ：jABAシアター
— 行動分析的視点で映画をみると —

伊藤正人(大阪市立大学)

「クラリス。もう子羊の悲鳴は止んだか？」脱獄した人肉食事件の殺人鬼で元精神科医のレクターがFBI女性訓練生クラリス・スターリングに電話で問いかける。「もっと長く話したいが、これから古い友人を夕食に... さようなら」次の殺人を暗示して電話は切れる。映画「羊たちの沈黙」の最後の場面である。

ジョディ・フォスター主演の「羊たちの沈黙」は、1991年度のアカデミー賞 5部門で最優秀賞に輝いたサスペンス映画の傑作である。トーマス・ハリスの同名の原作にもとづくこの映画では、美しいFBI訓練生クラリス・スターリングを主人公に、収監されている殺人鬼で元精神科医のレクターをからめ、レクターとクラリスの間の精神分析的問答を軸に物語は展開していく。「羊たちの沈黙」という題名は、レクターが聞き出した、クラリスの幼少時の体験に由来している。

ある日、クラリスは、FBI行動科学課の上司クロフォードに呼ばれ、バッファロー・ビルと呼ばれる連続猟奇殺人犯の手がかりを、収監中の殺人鬼で元精神科医のレクターから得るように命令を受ける。彼女は、厳重に監視された独房に収監中のレクターに質問紙を渡し、犯人像割り出し(プロファイリング)に協力を依頼するが、拒否されてしまう。しかし、美しいクラリスはレクターの注意を引くには、十分だったようで、クラリスに関する個人的な質問と交換にいくつかのヒントをくれるが、犯人の割り出しには直接結びつかない。そうこうしているうちに、バッファロー・ビルによる次の犠牲者が出てしまう。クロフォードとともに検視に赴いたクラリスは、幼少時の父の葬儀の場面を思い出す。このあたりの映像は、思い出と現実の被害者の検視場面を巧く交差させ、この映画に印象深い陰影を与えている。クラリスは、被害者の喉の奥に押し込まれた蛹を発見するが、犯人の手がかりとなるこの蛹は、アジア原産の「死の頭」と呼ばれる不気味な蛾の蛹であった。

さらに、上院議員の娘がバッファロー・ビルに誘拐され、捜査は緊急度を増してくる。これまでにFBIが収集した犯人のプロファイルデータによると、3日間は生存している可能性があるという。クラリスは、意を決して、レクターに娘の救出への協力の交換条件として美しいプラム島への移送という架空の提案をする。レクターは、捜査への協力を承諾したが、むしろクラリスの個人情報と交換しようという。ここから、レクターとクラリスの間で緊迫した問答が始まる。一方、盗聴により、架空の提案を知ったレクターの担当医チルトンは、自分の手柄とすべく、上院議員と交渉した具体的な交換条件をレクターに突きつける。レクターは承諾し、厳重な拘束具を装着されて上院議員のいるメンフィスへ移送される。FBIは、レクターの語った犯人の名前と特徴を手がかりに、犯人の逮捕を目指して、一斉捜査を開始する。

クラリスも、また、個人的にメンフィスに飛び、何とか犯人の手がかりを得ようと、再びレクターとの問答で自分の過去、父の死後、預けられた叔父の農場での体験を話す。ある寒い明け方、悲鳴を聞いて起きだし、声のする納屋を恐る恐る覗くと、それは、屠殺される子羊の悲鳴だった。夢中で1頭の子羊を抱えて、農場を逃げ出したが、やがて保安官に捕まり、怒った叔父に施設に送られたというのである。それ以来、時々、明け方に子羊の悲鳴を聞くという。レクターは、「この事件が解決したら、羊たちは沈黙すると思うのか」とクラリスに問う。ここから、この映画の題名が採られているのである。

クラリスの再三の哀願に答えて、レクターは、犯人逮捕のヒントを諭すように話し始める。「事件を解決する鍵は、バッファロー・ビルのプロファイルデータのなかにある。プロファイルを読めば解る」とレクターはいう。このくだりが、この映画の核心部分であり、また、行動分析的にも重要な部分なのである。このくだりを再現してみよう。

「彼は何をする、クラリス？ 彼は人を殺すことによってどのような欲求をみたしているのか」

「怒りか、疎外か、性的欲求不満...」クラリスは答える。

「違うね。とても強い願望だ。彼は願望している。人はどのようにして願望し始めるのだ？」

「つまり、その...」答えにつまるクラリス。

「人は、毎日見ているものを願望することから始める。君の体も多くの目にさらされている」

ここで語られているのは動機づけの問題である。この問題には、怒り、欲求 不満という心的概念への言及は不必要であり、外に目を向ける必要があるということの意味している。犯人の動機として、怒りや欲求不満という内的過程ではなく、我々が願望するもの、つまり、毎日見ている外的対象を同定すればよいのである。動機づけあるいは動機とは、人の内部にある特別な過程ではなく、人にとって外的刺激を効果的にする環境要因のことである(例えば、食物の剥奪という要因は、食物に強化効果を付与する。満腹した直後に食物をだされても、だれも食べたいとは思わないであろう)。つまり、内なるものは外にありということなのである。

レクターは、この後、想像を絶する方法でメンフィスの牢から逃げ出してしまふ。クラリスは、レクターが与えたヒントを手がかりに、最初の被害者の周辺を捜査し始める。ここでは、クラリスの捜査とクロフォードらの捜査の場面が重ね合わされて、劇的な効果をあげている。クラリスは、訪問したある男の家の室内に例の蛾が飛んでいるのを見つけ、犯人であると確信するが、一瞬の隙に男は、家の地下室に逃げ込んでしまふ。暗闇の地下室で繰り広げられるクラリスと暗視スコープを装着した犯人との戦いは、この映画のクライマックスである。犯人の銃の引き金の音にすばやく反応したクラリスが犯人を射殺し、無事娘を救出して事件は解決する。映画は、FBIアカデミーの卒業式を迎えたクラリスがレクターから次の殺人を暗示する電話を受けるところで終わっている。

「羊たちの沈黙」では、レクターとクラリスとの精神分析的問答によって物語が進行するが、この映画の主題は、精神分析的なものではなく、FBI行動科学課で行われているプロファイリングと呼ばれる犯人像割り出しのための行動的方法にある。プロファイリングとは、行動的特徴にもとづく犯人像の類型分類のことであり、プロファイルデータとは、つまり、行動データなのである。このように「羊たちの沈黙」の内容は、極めて行動分析的といえるであろう。最近、このプロファイリングを主導していた元FBI捜査官の手記の邦訳が「FBI心理分析官」という題名(原題はWhoever fights monsters)で出版されたが、むしろ「FBI行動分析官」とする方がふさわしい。本書は、犯罪者との面談から得られた言語報告よりも様々な行動データから作られたプロファイルの方が信頼性が高く、犯人像の特定に有効であることを指摘している。

海外で行動分析学を学ぶ可能性(1)

—学部在学中の1年間の留学—

杉山尚子(慶應義塾大学)

QWL05617@niftyserve.or.jp

1952年に、ハーバード大学から2台のスキナーボックスが届けられて以来45年、わが国の行動分析は着実に発展を遂げてきた。1980年に創設された日本行動分析学会の会員数は400名に達しようとしている。毎年5月末に開催される国際行動分析学会年次大会への参加者も、1978年の山口薫先生以来、のべ120余名を数え、近年は学生会員の参加もめざましい。また、慶應義塾大学の佐藤方哉教授が、遂に米国人以外ではじめて、第23代国際行動分析学会会長に選出された。行動分析を学べる大学の数やコースの数も増えている。

しかし、行動分析の研究・教育で世界一といわれるカンサス大学、世界第二のウェスタン・ミシガン大学、それに続くウェスト・ヴァージニア大学、新興のオハイオ州立大学、オーバーン大学、ノース・テキサス大学、ネヴァダ大学リノ校などと比較すると、行動分析家の教員数、行動分析専攻の大学院生の数、行動分析のコースの数など、まだまだ圧倒的に少ない現状は否定できない。ちなみに、カンサス大学では、専任教員が28名、大学院生が修士課程30名、博士課程125名、科目数が28ある(データは1995年度)。

わが国でも多くの先達が、行動分析の教育と研究と普及に力を尽くし、めざましい研究水準の引き上げに成功してきている。しかし、短期間に集中的に新しい知識を身につけうるアメリカの大学/大学院教育システムと、国際行動分析学会会員の95%が北米大陸で仕事をしている現状を見ると、日本を離れ、行動分析の発祥の地で勉強することの利はまだ残っていると思われる。

この手段として、いくつかの方法がある。1つは研究者をめざして博士号取得のために大学院へ

留学することで、これは、行動分析に限らず、どの分野でも行われている。筆者は、近年、これ以外に、多くの方のご協力を得て、短期間(1年以内)、海外で行動分析を学ぶためのプロジェクトを推進してきた。日本の大学の夏休みを利用して、アメリカの大学の夏学期のコースを履修するというのがその1つで、これに関してはJ-ABAニュースでもたびたびお知らせし、1994年の第1回以降、のべ20名の学生諸君が留学を試みている。

本稿では、もう1つの手段、学部時代に1年間留学し、行動分析を学ぶことの可能性をご報告する。この可能性を実現してくれたのは、慶應義塾大学で筆者が担当している「実験的行動分析(行動分析の入門コース)」を履修した、文学部史学科西洋史専攻の林裕介君である。林君は、3年生の時に1年間、私の授業を履修した後、4年生に進級した4月の末、ウェスタン・ミシガン大学へ出発した。春・夏の2学期は語学学校で英語の勉強をし、秋・冬の2学期を心理学部で過ごし、以下の5つの行動分析のコースとコンピュータの授業を1つ履修し、この春帰国した。西洋史を専攻する学部生が、わずか半年間で、ラットを使った動物実験をし、外国語で自閉児の言語習得の訓練ができるようシェイピングする教育のすべてを紹介することはできないが、履修した科目と使用した教科書、そして、同君がもっとも印象に残ったという、発達障害児の臨床実習の授業の様子を報告していただくことで、その一端をお知らせしたい。

なお、教材として、この他、担当教授作成の学習ガイドや、公刊論文などが常に多数用いられている。また、実際の授業はTA(大学院生のティーチングアシスタント)によって行われるものも多い。

<林君の半年間に履修した行動分析の科目>

- 1. PSY357 Practicum with Special Populations 担当教授: R.W. Malott教授 / 教材: (1) Lovaas,O.I.(1981). Teaching developmental disabled children. Austine: PRO-ED, Inc. (2) Maurice,C. (1993). Let me hear your voice. New York: Fawcett Columbine.
- 2. PSY360 Concepts and Principles of Behavior Analysis 担当教授: R.W. Malott教授 / 教材: Malott,R.W, Whaley,D.L, Malott,M.E. (1997). Elementary principles of behavior, 3rd ed. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 3. PSY444 Industrial/Organizational Behavior Analysis 担当教授: J. Austine教授 / 教材: Daniels,A.C. (1989). Performance management, 3rd ed. Tucker, GA: Performance Management Publications.
- 4. PSY460 Survey of Behavior Analysis Research 担当教授: R.W. Malott教授 / 教材: Malott, R.W, Whaley, D.L, Malott, M.E. (1997). Elementary principles of behavior. 3rd ed. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 5. PSY560 Behavior Medicine 担当教授: R.W.Fuqua教授 / 教材: (1) Beutler,L.E.(ed.) (1992) Journal of Consulting and Clinical Psychology. Washington D.C.:the American Psychological Association. (2) Doleys, D.M., Meredith, R.L., & Ciminero, A.R. (Eds.) Behavior Medicine. Plenum.

報告: クロイドンアヴェニュースクールでの3カ月

林 裕介(慶應義塾大学文学部史学科西洋史専攻)
hayashi@annie.co.jp

昨年一年間ウェスタンミシガン大学に留学し、行動分析学を勉強してきた。日本では歴史学を専攻しているが、行動分析学の論理性、実用性にひかれていき、いつのまにか自分の中で、歴史学が「専攻」、行動分析学が「趣味」という関係が逆転していた。そしてついには「本場アメリカで、もっと本格的に勉強しよう」と考え、ウェスタンへの留学にまで至ってしまった、という次第である。そこで私はクロイドンアヴェニュースクールという養護学校で、自閉症児の行動分析学を生かした養護教育の実習(PSY357)に参加する機会を得た。アメリカ留学の目的の一つとして、とにかく実践的な知識を身につけることを考えていた私は、喜んでこの授業に参加した。

この授業は時間的にも内容的にもたいへんハードなものであった。月曜から金曜まで毎日2時間の実習と週一回の講義からなっており、成績は主に毎回講義で行われるクイズと出席によって決まる。クイズは内容自体は簡単であったが、出題範囲はたいへん広く、毎回2冊の教科書を20ページずつほど読まなければならなかった。このクイズの出題範囲などはアメリカの大学では珍しいことではなかった。勉強以外何もやることのない環境の中、週末を除くと、私は寝ている時間と食

事している時間、移動している時間以外はほとんど勉強に追われていた。歴史学を専攻している関係もあり、「自分はそれくらいやらないといけない」という強迫観念のようなものが私を勉強へと駆り立てた。その結果、日本の大学に慣れきっていた私は、初めは困惑したが最後のほうは何とも思わなくなっていた。人間追い詰められれば何とか「する」ものである。

この授業に参加するにあたり、私も自分の車を購入した。よく言われることだが、車社会のアメリカでは車がないと本当にどこにも行けない。授業に行くことにすら支障が出るくらいである。一応バスはあったのだが、一時間に一本あるかないかぐらいで、しかも時間通りに来ないのが当たり前、といういかにも「アメリカ的」なものであった。私は、時には大雪とその寒さのため学校が休みになってしまうような中を、日本では決して車検に通らないような車をせつせと運転し、毎朝クロイドンアヴェニュースクールへと通った。

私の担当の子供はティミーとジョスティンという子たちだった。ティミーのトレーニングでは大変苦勞をした。一つには、彼が健康上の理由で授業の三分の一ほどを欠席し、十分な時間を取れなかったことがある。だがそれだけでなく、初めのうちはなかなか私が自分の感情を排して彼らに接することができなかつたからである。いざ課題に着手しようとした時に、彼があどけない表情で、もがくように私の顔に手を伸ばしてきた時など、初めのうちは「かわいいな」とは思ったが、それが一向に止まないでいるので思わず「No! Stop it!」と強く言ってしまったりした。「これではいけない」と冷静になろうと努める。だがまた妨害行動が起きると、つい「No!」と感情的になってしまう。確かにその妨害行動の頻度を下げたためには「No!」と多少強く言う必要はある。だがトレーニングの際に感情的になってしまうと良いことはなにもない。必要以上に強い口調になってしまうし、何より強化すべき良い行動までも見落としてしまうか、あるいは十分に強化できないからである。教科書(「行動分析学入門」)には「行動を憎んで人を憎まず」という行動分析学の極意が書いてあった。それを読んだときは「そんなことは簡単だ」と楽観視していた。トレーニングの際に、自分の感情をはさみず彼らと接することは想像以上に大変なことであった。

だがジョスティンとのトレーニングは、大変順調だった。彼も初めのうちは、課題を始めようとする下を向いてごそごと靴を脱ぐことに執着したりして、トレーニングを妨害した。だが、その行動は比較的楽に消去することができた。そして、ほどなく彼は、とりわけ言語に対して大変な進歩を見せた。特に印象深かったのは「(I want a) cracker, please.」という言葉覚えてくれたことだった。それまでの彼は、クラッカーが欲しいときはかんしゃくをおこしてみたり、「アー、ウー」と言ってやみくもにクラッカーのほうに手を伸ばしたりして、言語を介しない直接的な行動で自分の要求を通そうと躍起になっていた。その後は、もちろん時にはプロンプトで促したりもしたが、クラッカーを見せると「cracker, please」と、たどたどしくはあるが、確実に私に理解できる言葉で自分の要求を伝えてくれた。そしてクラッカーをもらおうと、真剣な表情で一心に食べていた。私はうれしくて、にこにこしながら彼に何度もクラッカーをあたえていた。

私にとって、この体験の持つ意味は大きい。一つは行動分析学を学ぶ者として、その知識がどのくらい有効で、かつそれにどのくらい問題解決力があるのかを体感できたからである。またもう一つは、人として、自分の知識を他人のために生かすことができることを証明できたからである。この貴重なクロイドンアヴェニュースクールでの体験が、私の留學生活の最大の財産であることは言うまでもない。

研究室紹介: 駒沢大学心理学研究室(行動分析研究室)

山岸直基(駒沢大学人文科学研究科)

現在、行動分析学会会長である小野浩一先生は、1979年に駒沢大学に専任講師として着任し、それと同時に学部生のゼミを受け持つようになりました。そして1991年から大学院も担当するようになり、現在に至っています。駒沢大学大学院は「行動分析学」という講義・演習がある数少ない大学の1つであり、もちろん小野先生が担当しています。まず、小野先生の受け持つゼミについてお話ししたいと思います。

小野ゼミは現在、学部の3年生から大学院生まで総勢24名です。ゼミの活動として学部生はそれぞれ週1回のそして大学院生は週2回の演習があります。小野ゼミでは修士課程と博士課程を区別せずに大学院の演習としているので週2回なのです。その演習では大学院生が順番に、自分が興味をもった英語の実験論文(主にJournal of the Experimental Analysis of Behavior, The Psychological record, Journal of Experimental Psychologyなどに掲載されたもの)を授業2、3回で紹介します。大学院生はそれぞれいろいろな興味をもっているため、最近数年間に取上げたテ

一マだけでも、刺激等価性、rule governed behavior、言語行動、選択行動、反応と強化子間の依存性、協力と競争、行動の変動性など多岐に亘ります。小野先生は「(先生を含めて)誰に対しても遠慮せずに意見・質問をする」ことをゼミの方針としていて、またそういった行動が強化される随伴性を用意しているので、とても活発に意見交換が行われます。このようなやり方は物事を論理的に考えるトレーニングになり、私たちがこれから研究者としてやっていく上でとても良い訓練になります。また、ある年度では、「1人1回 Skinner の論文を読もう」と決めて Evolution of verbal behavior や Selection by consequences、Baby in a box、Intellectual self-management in old age などの論文を読んだこともありました。

また、合宿が多いのも小野ゼミの特徴です。春、夏、冬の年3回の合宿は学部生、大学院生が集まりそれぞれ現在の研究の進行状況について発表します。特に学部生はそれぞれの合宿では発表しなければならないこと(たとえば実験計画や途中経過など)が決まっているので合宿が近づくとみんな発表の準備に追われて大忙しです。このように比較的短い期間ごとに締め切りが設定されているので、最終的(年末)には無理なく卒業論文を提出することができるのです。ところで箱根の温泉旅館で行われる4年生の卒論完成をねぎらう冬の合宿では恒例の「一人一芸」大会が挙行されます。小野先生は「笑い」に対してとてもセンシティブな方なので日頃から学生に「中国のカレーはチュゴクかれー」などと言って笑わせます。もしかしたら「一芸」披露を一番楽しみにしているのは小野先生かもしれません。

次に行動分析の実験室を紹介します。わが研究室は動物実験室と人間を対象とした実験室の両方を備えています。まず動物実験室ですが、これは小野先生がUniversity of MarylandのCatania教授のところで1年半研究生活を送り、その後駒沢大学でも動物実験室を作ろうということで1988年にハトの実験室をつくり選択行動についての研究を始めました。そして1991年には駒澤社会学研究(駒沢大学社会科学の紀要)に「動物実験室の2年間」と題して初期の成果および運営の際の苦勞を綴っています。現在は選択行動の他に履歴効果についての実験を主に行っています。

動物実験室における日々の実験および清掃は学部生および大学院生による「ハトスタッフ」がボランティアで行っています。この5月に小野先生の履歴効果についての論文がJournal of the Experimental Analysis of Behaviorに掲載され、その脚注に駒沢大学のハトスタッフに対する謝辞が述べられていました。このことはハトスタッフのメンバーにとってとてもうれしいことです。また、動物実験室にデモンストレーション用のチェンバー(実験箱)があるのも一部で有名になっています。これは主に教養科目の心理学の授業で動物実験の様子を実際に生で見ってもらうためのものです。キーとフィーダーがついた壁以外はすべて透明なアクリル板で覆われているので、ハトが中でどのような動きをしているのかをよく見ることができます。そして心理学の先生から依頼があったときに、ハトの行動を実際に学生に見せながら「強化」や「弁別」についての話をハトスタッフが行います。

つぎに人間を対象とした実験室についてです。小野先生が就任した当初は有り合わせのもので応急処置的な装置を使って実験を行っていましたが、1981年に本格的な装置を作りました。それは東京の向島の鉄工所に頼んで作ってもらった3つの大きなレバーです。それぞれのレバーは1辺30センチの鉄製の箱によって支えられたとても頑丈なものです。この装置を使って迷信行動やスケジュー ルパフォーマンス、rule-governed behaviorなどについて多くの実験を行ってきました。その後、3つのボタンのついたオペラント反応装置や5つのボタンがつけられた選択行動研究用の装置を作ったり、コンピュータをそろえたりと徐々に実験設備が充実していきました。そして、3つのボタンのついたオペラント反応装置を利用して、ハトを被験体とした履歴効果の実験と人間を被験体とした場合の比較を行ったこともありました。また、これまで多くの大学院生および学部生が、小野先生の指導のもとでこれらの装置を利用して多くのデータを生み出してきました。このように行動分析研究室では動物実験と人間を対象とした実験を2つの柱とした実験的行動分析を実践しているのです。

ところで今年は小野先生が行動分析学会会長に選出されたことに伴い、事務局も駒沢大学に置かれるようになりました。事務局員は小野ゼミの大学院生が受け持つようになったので以前より忙しい日々を送っています。しかし、学会がどのように運営されているのかを間近で見ることのできる良い機会でもあり、みんな事務局員として頑張っています。もちろん仕事をやり易いようにと小野先生が全体をうまくオーガナイズしてくださっているの言うまでもありません。

研究にも、遊びにもそして事務にも熱心な小野研究室についてまだ書き足りないこともあります。これで小野ゼミがいかなるゼミであるかを少しは感じとっていただけたのではないかと思います。駒沢大学は東京都世田谷区にあり、となりが駒沢公園というとても立地条件の良いところにありますのでぜひ一度遊びにいらしてください。

お知らせ：第15回年次大会での企画「論文交換テーブル」について

山本淳一(研究委員会)

来たる11月23日、24日の日本行動分析学会第15回年次大会にて、論文情報交換のための出店を出す予定です。

これは、「行動分析学研究」以外の雑誌や本に、会員の皆様のご執筆になった論文などの別刷りの交換をすることで、会員間の研究情報の交換を促進し、さらなる研究の活性化をはかる目的で行われます。特に、行動分析学会員が少ない学会誌や、大学や研究所などの年報、紀要、業界誌など大歓迎です。

つきましては、会員の皆様には、学会当日、ぜひ、論文の別刷りを10部程度ご持参いただきたいと思います。机に置かれた別刷りを、空いた時間に読んでいただき、興味をもたれた方が、封筒に住所を書いていただくようにしたいと思います。論文郵送用の封筒もご持参いただければと思います。

ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

この件に関するお問い合わせ、ご意見は、下記までお願いいたします。

明星大学心理学研究室 山本淳一

TEL:0425-91-9200 FAX:0425-91-8181

email: yamamotj@psy.meisei-u.ac.jp

編集後記

- 今年は忙しい夏でした。昨日ようやく日心も終わって、これで一息。来週は南アルプス方面へ雲隠れです。
- 現在、次期編集局長候補を捜しています。詳細は次号に(でも我こそはと思う方はドシドシフライングしてきてね)

J-ABAニュース編集局

〒772 鳴門市高島 鳴門教育大学 人間形成基礎講座

島宗理 TEL 0886-87-1311(内340) FAX 0886-87-1053

E-mail simamune@naruto-u.ac.jp

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人求職情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイルの形式で、電子メールかフロッピー(DOS/Mac)により編集局までお送り下さい。2000字程度を目安にし、本紙1頁におさまるように考えていただければ結構です。

尚、次号の〆切は97年10月14日です。